

第十三騎士団出動中

梨汁

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

王道ファンタジー系SRPG『フォルテシア』の世界に転生した男。彼はこの世界で警察に当たる警備組織、『騎士』の一人になるのだが、元日本人であるため人を殺せず、敵を気絶させることしかできなかった。そのため『不殺の騎士』と呼ばれ、どんどん名を挙げて行く。そんなある日、男は知らないイベントに巻き込まれてしまい、その末に『第十三騎士団』の騎士団長へとなってしまう。

彼は知らなかった、そのイベントが裏ストーリーに入るための、大切なイベントだということを。

しかもその騎士団に入って来る人たちは原作に出てくる奇人・変人揃いの敵ばかり、それどころか望んでもいないのに原作が絡んでき始める。

主人公やその仲間やらに有らぬ疑いをかけられつつも、彼は普通に生活して普通に結婚して普通に死ぬために、今日も剣を振るう。

目次

第1章：新生第十三騎士団結成

プロローグみたいなもの	1
昇進おめでとう	9
盲目の白剣士	14
魔術師とシスター	20
混沌のイカレ女	25

第1章：新生第十三騎士団結成 プロローグみたいなもの

経験というのは、案外忘れられないものである。

習慣、常識、偏見、成長の中で身についたものは中々離れることはない。

例えば、転生したとしても。

そう俺は転生したんだ。かつて中学生の頃やっていたゲームの世界に。

と言ってもそこまでやり込んでいたわけではない。取り敢えず適当にイベントこなして、クリアまでやり通した感じだ。

ジャンルはSRPG、王道感溢れるストーリーに可愛いヒロインたち。まあぶっちゃつけ、敵のほうが可愛いキャラ多かったが。

世界観を簡潔に言ってしまうえば、ど定番ファンタジー。モンスターに剣と魔法、洋風な家にたくさんのお国。外に広がるはだだっ広い平原。そして敵は魔王。

まさにつて感じである。

そんな世界に俺は転生した、一般人として。どうやって死んだのか、どう言う経緯で転生したのか、覚えているものは何も無い。

ただ明確に、前世の記憶がある、と言うことだけだ。俺は記憶を頼りに生きること十歳、自身の父親がそのゲームの登場人物であると理解し、俺はこのゲームのことを思い出した。

主人公は騎士となり、そして騎士団長として仲間を率いて魔王を倒す。勇者ではないが仲間と共に悪を打ち砕く、と言うストーリーであると言うことも。

漠然とした記憶ではあるものの、ゲームの知識を頼りに俺は剣を振ることを選ぶ、主人公と同じ騎士になろうとして。

で、なった。剣の技術をとにかく磨き、本を読んで剣術を習って積み重ねていった結果、俺は騎士になれた。なれたままでは良かったのだ。

だが騎士というのは国の治安を守るための警察のようなもの。ただの警察ではない、人を殺す権限与えられた警察なのだ。

そして任務本番、俺は剣が振れずただ立ち尽くすことしかできなかった。なんせ前世は日本人、人が死ぬなんて当たり前前の世界ではない。人の死を目の当たりにして、無事で入れただけよかったというものだ。

俺は考えた、どうすればいいか。どうすれば騎士としてやっていけるのか。そして生み出した、新たな剣術を。

武器を破壊し、相手を的確に気絶させる剣術を生み出したのだ。次の任務からはその剣術を使うようになった。

そこからは実践と共に技術を上げて行き、それと共に俺は騎士団の中でも名を挙げて行った。

そのうちこの世界での目標ができていった。普通に暮らして普通の家庭を築いて、普通に死にたいと。

騎士なんかやってる時点で普通とはちよつと言いだろかもしれないが、要は原作には絡みたくないということだ。

名が挙がつている程度じゃ原作に絡むこともないだろうし、前世では俺の息子は未使用のままだった。だからこそその目標であった。

俺は今日も、その目標を達成すべく生きて行く。殺すことのない剣を振るいながら。

「……まずいまずいまずいッ!! なんて騎士が来やがったッ!!」

ドタドタと騒がしく、土塊で作られた地下に音が響く。足音に叫び声、それら全ては剣戟によって掻き消される。

奥に視線をやれば数十というファンタジーな武装した男たちが向かって来る様子が見える。

体つきの良い貧相な服で、剣やら槍やら斧やらと、怒りの形相で構えて走って来るのだ。

だが俺は冷静に剣を握ると、目の前から走ってくる男の武器を破壊し、後頭部に剣を叩きつけると飛んで壁を蹴り、天井に足をつくると奥に潜む集団の中心へと飛び込む。

飛び降りたその場で、握った剣とともに踏み込んで周囲の男たちを

蹴散らすと、すぐさま潜り込むにして次々と武器を破壊して行く。

破壊に次いで、俺は剣で頭部の絶妙な位置に打撃を与える、気絶するようになる。

「く、そッ……!!　なんで、『不殺の騎士』が、あアア……」

最後に倒れた男のそんな言葉を聞き届け、血の付いていない剣をしまうと男たちを縛る。身動き取れなくなったことを確認して奥地へと進んで行く。

先へ進めば進むほど、辺りの道は整い湿って、汚くなって行く。

加えて酷い匂いに叫び声と泣き声。

そしてそれに入り混じるかのように恨み言も聞こえてきた。

「……はあ。なんで、こんなことになってんだろ……」

猫背の姿勢でため息とともに肩を落とす俺。団長からはため息ばかりしていると言げると逃げると言われたが、吐きたくなっても仕方ないというものだろう。現状を見てしまえば

徹底した管理のもと統制されていたはずの騎士団の一つが裏切り。

しかもだ、奴らがしたのはまさに国家に対する反逆とも言える行為。

俺の住む国、そしてゲームの舞台でもあるモルデスト王国はその名の通り君主制の国である。

そのトップに位置する王様は、徹底した反奴隷主義。要は奴隷制度が嫌いだ、ということらしい。

ちっちゃい頃、色々あったそうだがそんなことは置いといて。反

奴隷主義であるため、モルデスト王国内で奴隷の売買、奴隷の所持を禁ずるという法律が出されている。

ただ、奴隷というのはどうしても需要があるものだ。

現代地球には機械という奴隷に代わるものがあるからいいけれども、この世界には当然機械などという未来技術は存在しない。

故に、奴隷には需要というものがある。古典的だが裏で悪事を働くお偉いさんなどが、色々な目的で買い求めるのだ。

そういうやつらが買うのは別にいい、バレれば処されるだけなのだから。

だが今回は根本的に話が違う。

騎士団は階級として騎士、騎士団長、騎士総長と並んでいる。そしてその騎士総長に直接命令を出すのが王様になる。王様が全責任を担っているのだ。

そして今回、その騎士団の一つが裏切り、国家反逆、奴隷売買に手をを出していたのだ。

国民にバレれば王様の信用はガタ落ち間違いなし、だと思おう。

だから偶然、警備周回でそんなところを見かけた俺は一人で追跡。そして今はアジトに侵入して剣を振るっている、ということなのだ。

取り敢えず滅しようとは思っているものの、後のことは考えていない。

(そう言えば仕事終わりに友達と酒を飲む約束をしていたな。さて間に合えばいいのだが……)

懐から懐中時計を取り出して今の時間を確認する。夜の八時くらい、外はいい感じに真っ暗だろう。冬だから尚更外は暗いだろう。

雪が降ってなければいいのだが……などと考えながら歩いていると、背後から聞こえた突然の物音に俺は剣の柄を握る。いつでも抜いて攻撃を繰り出せるように、足を強く踏み込む。

だがよく聞いてみれば聞こえてきた音は、泣き声のようなもの。既に結構な人数を助けたと思っていたのだが、まだ捕まった人たちがいたらしい。

俺は剣から手を離すと急いで声のした方へと向かう。するとそこには土塊に開いた横穴に、適当な鉄格子がはめられていて簡単には出られないようになっていた。

「大丈夫、ですか」

俺が駆け寄って、一番手前にいた少女へと話しかける。

その少女は驚いて「ひっ」と声を上げると後ろへ下がる。だが俺の顔を見てゆっくりと近づいてきた。

「……あ、ああ。べ、別の……き、騎士、様？」

「はい、ここにいるやつらとは別の騎士です。第二騎士団所属、アルベルトと申します。皆さんを助けに来ました」

俺は今世の名を名乗って剣を抜くと、鉄格子の扉の鍵を剣で破壊する。剣を収め扉を開き、中にいる人たちに外までの入り口を教える。先に出て行った人たちに騎士団への報告をするよう言ったから、騎士団たちはそろそろ来てはいるはず。と言うことを伝えると皆、お礼を言つて走り去って行った。

最後に出てきた少女を確認し、中をもう一度見渡して誰もいないことを確認してドアを閉めた。

「あの……アルベルト、様」

「ん……う」

名を呼ばれ振り返ると、そこには一人の少女が立っていた。俺と同じ茶髪の少し小柄な少女が。

「ありがとうございます……!!」

それだけ言うと外へと向かつて走り出す。俺は少し照れくさくなって頭の後ろ辺りをぼりぼりと搔いた。

何か言つてあげればよかったなと思いつつ奥へと目を向ける、

奥にいるであろう首謀者を捕まえようと思い、歩き出した瞬間のことだった。突然背後から感じた気配に俺は剣を抜いて背後へと振り抜き、更に踏み込んでからの追撃の一撃。

一度の剣は避けられたものの、それを見越しての二度目の剣を誰かが受け止める。

そこから思いつき踏み込んで、からの追撃。数度に渡る一瞬の追撃は全て受け止められ、俺の攻撃を受け止めた奴は大きく後ろへと飛ぶ。

瞬間的、一秒にも見たいない時間だが、俺の剣技はその一瞬に七、八回剣を打ち出せる。

と言つても騎士ならば一瞬で二、三回出せるのは当然であり、剣術を習っているやつならば対処できて当然の範囲である。

だが、今回の相手は今の一瞬で十回以上打ち出してきた。五、六回までならばこちらも受け流しながら攻撃はできるのだが、それ以降はただ身を守るだけになってしまう。

だから終わった瞬間に俺は剣を突き出したのだが、どうやらその攻

撃すらもカウンターをされていたようだ。

左腕にできた切り傷を見てそこまで深くないことを確認する。多少の痛みを感じるもののもう慣れた痛みであった。

「今ので首落とす気でいたんだけど……なるほど君だったか」

「第十三騎士団長、ヘルエムさん……なに、やってるんですか」

第十三騎士団ヘルエム。原作にももちろん出てくるキャラ。だがメインストーリーに絡んでくることはなく、絡んできても主人公に軽い嫌味を言うだけだった。

それがなぜ、こうなっているのだろう。奴隷売買なんてイベント見たことがない。原作から変わったのか、俺が見ていないだけか。どちらにしろあまり深入りしたくはなかった。

だって俺、騎士団員だけが関わってると思っていただけだからさ。こうなるのは流石に予想外だった。

「誰の命令だい？ ……いや、その様子だと突発的な行動だね？ 私の団員が見えて……と言ったところかな？」

「そうです。ただあなたの団員だけが関わってると思った。だけど……まさか、あなたまでも」

「……世界を変えるためだ。仕方のないことなんだ」

「これが？ 仕方のないこと？ ……教えてください。これがどこが仕方のないことなんだ」

俺は隙のない構えを取ると、思いつき踏み込んで飛び出した。

様々な剣術を取り入れて生み出した俺の剣術は、とにかく小手先の機動力に全振りしてある。

だから壁に飛び移り、天井に飛び、反対側の壁に飛び移って、敵へと突撃する。異世界だからこそでできる芸当だと言えよう。

意味あるの？ と聞かれるがこの行動で相手はどこから来るかと、混乱することになる。

上から来ればそれを防ぐために別の場所がガラ空きになる。横も同じだ。

だから俺は更に飛んで横から天井へと飛び、落ちるとともに振り下ろす。

振り下ろしは一瞬、威力は大きく床に落ちるとともに音が響く。だが剣は、見事に防がれていた。

俺は剣を回つ横に構えを取ると、飛び出して剣を振るう。

俺の剣が独自の剣術であるためにヘルエムはだんだんと苦しい顔をし始める。俺の剣術、打ち合ったこともない型にかなり苦労している様子だった。対する俺は何度も受けたことのある型。同期たちが使っている剣術とヘルエムさんは同じものを使っていた。精度に速度、その他諸々桁違いだったが、受け止めることは容易かった。

だから決着がつくのに、そう時間はかからなかった。

そこから数分後、俺はヘルエムの剣を弾き飛ばし浮いた剣を叩き壊す。そして奴の首元に剣を当てると、ヘルエムは両手を挙げ降伏の意を示した。

「……私の負けだよ。だが本当に殺さないんだね。『不殺の騎士』は」
「終わりです。これからどうなるか、予想は容易いはずです……何で、こんなことやったんですか」

「……言っただろう。仕方のないことだと、世界のためさ。今の君には到底理解できないだろうけどね」

「できませんよ。そんなこと……」

俺は剣を少し上げて頭の辺りに移動させる。そして気絶させるべく剣を振ったその瞬間、奴は言った。

「君もすぐに知ることになるさ。何もかもね」

そこから大体十分後ぐらいして、他の騎士たちが突入してきた。

俺は他の騎士に任せて休憩。後の報告によれば奥にはまだたくさん人がいたようで、しばらくの間戦闘や救助活動があったとのことだった。

最終的な皆助かり、全員捕まったとのことだった。首謀者を除いて。

ちなみに騎士団長は監獄行き、情報を吐かせるために処刑はしないらしい。

全て終わって一安心、かと思っていた俺のところの一つの伝令が届く。

この伝令が全ての幕開けだった。騎士団長としての俺の、新たな戦いの幕開けだった。

昇進おめでとう

「……へ？ お、俺が騎士団長、ですか？」

「そうだ。昇進おめでとう、アルベルトくん」

そうやつと差し出された手を、俺は困惑気味に握る。すると向こうも嬉しそうな笑顔で俺の手を握り返した。

いやはや、意味不明。意味不明も意味不明である。あまりに突然すぎて何から把握して、どう把握していいかすらわからないレベルである。

俺が突入にした奴隷事件から、一時間もしないうちに伝令が来た。要件は至急騎士総長のところまで来るように、という簡潔なもので、俺は馬を借り大急ぎで向かった。

ただ夜のちようどいい時間だったこともあり、外には人が多く少し時間がかかってしまったのだが。別に怒られたわけではないからいいのだが。

「あの、話が理解できないんですが」

「だろうと思ったさ。ま、突然こんな話されて、理解できるやつなぎ、そうはいねえ。取り敢えずそこ座りな」

「は、はい。失礼します……」

俺は対面するように置かれている目の前の椅子に座って、提出された書類を手に取る。そこには騎士団長昇進手続きと書かれており、今回の話が冗談でもなんでもないことをしっかりと理解する。

(しつかりと『第十三騎士団』就任と……ん？ 第十三騎士団?)

第十三騎士団、今さつきなくなっただばかりの騎士団である。まあ俺は消した張本人なのだが。

これは一体どう言うことなのか、なんの冗談なのか。と顔を上げて騎士総長を見る。少し年老いた彼は笑みを浮かべて、俺のを見ていた。

「言いたいことはわかるぞ。何故、『第十三騎士団』なのか。」

「え、ええ……そりゃ。第十三騎士団、今なくなっただばかりの騎士団ですよね？」

「……まあ、今回の話は単純だよ、話題の焦点をずらしたくてね。それに穴の空いた席を埋めるにはちようどいい」

「話の焦点を……って。ま、まさか、いんぺ」

そこまで言って俺は口をつぐむ。まるで蛇に睨まれた蛙のように。いや、実際俺は蛙だった。その殺意には剣を抜こうと頭の中で考えていても、体が動かなかつたのだから。

畏怖とはまさに、このようなことを言うのだろうか。この件に関しては俺も別に反対ではないから、素直に頷いておく。

騎士総長は俺が軽く頷いたのを見ると、いつもの優しい笑みを浮かべたおじさんに戻る。

そこで俺は、一つ気になったことを聞いた。

「……前の、元第十三騎士団はどういう扱いになるんですか？」

「南方支部に異動だよ。アルケミア辺境伯が警備の人手が足りない、って言っていただろう？　と言っても、この話が外部に漏れることはないだろうけどね」

要は表向きは地方の方に異動、と言うことになっているらしい。それがベストだろう。騎士団が裏切りを犯した、と国民に知れ渡ればどうなるか、なんて予想は容易い。それよりも今のまま、ただ現状維持が一番いい。国民にとっても、俺たち騎士にとっても。

ちなみにアルケミア辺境伯とは原作にも出てくるキャラだ。めちゃくちゃいいおじさんで定期的に資金援助を行ってくれる。最終面では主人公側につき、ルートによっては王国と敵対するのだ。

この世界の、ゲームのタイトルは『フォルテシア』。俺の今いるこの世界の名前だ。マルチエンディングで中盤の選択によって最終的なルートが決まると言った感じのゲーム。やり込んでいないと言ったが、一応その辺りのエンディングは全部見ている。

ルートは主に三つ、『革命軍』ルート、『王道騎士ルート』、『魔王軍ルート』。

そしてその中で『革命軍』と『王道騎士ルート』にアルケミア辺境伯が出てくるのだ。どちらのルートでも絶対に主人公側につくキャラである。なんせ彼の娘が主人公の仲間にいるのだから。

そして辺境伯自体かなり強い、めちやくちや強い。騎士数人と一人で渡り合えるぐらいには強い。

彼自身、自分の領地を守るための兵士を大量に抱えている。それこそが警備が足りなくなることがない、ぐらいには。

と言つてもだ、その辺りの情報統制はいくらでもできるはずだ。騎士総長には国を動かせる程度の大体の権限が付与されている。国の安寧を守るためならば、なんだってやれる。やるしかない。

だから実際は騎士団の助けがいらなくても、必要だ、と表向きにはなるんだろう。

「で、昇進の話だが。はつきり言ってしまうえば、君に断る権利はない。理由はまあ、わかるね？」

「……」

色々と気になることはあるが心配事としては上手く隠蔽できるのか、上手いこと誤魔化せるのか、と言うところだ。まあその辺りは騎士総長全権限を持つてどうにかするのだろう。

そして昇進、俺が騎士団長になると言う話だ。これもまた色々不安事が付き纏う。そこで俺は恐る恐る騎士総長に質問をした。

「あの……騎士団長になる、これ自体は断るつもりはないですし、断る気もありません。ですが、団員はどうすればいいんですか？ 本来ならば騎士団長の入れ替わりに、そのまま団員を引き継ぐはず、なんですけど」

団員は昇進、騎士団長になる時、そのままその人が率いていた騎士団員を継ぐことになる。騎士団長が後任を指名する形で昇進するのから、内部で反発も起こらない。実に平和的。だが今回の、俺の場合は全く違う。そもそも騎士団が違う上に団員が全員監獄行きなのだ。このままでは俺は誰一人としていないまま騎士団を運営していかなくてはならない。一人騎士団なんてあまりにも酷すぎる。

だが騎士総長は安心しろと、言つて昇進手続きとは違う紙を数枚だす。差し出された俺はその紙に目を通す。

そこに書かれていた三人の経歴とプロフィール。しかも騎士団所属ではない。と言うか働いているかどうかすら怪しい状態、つて言う

かこれ。ゲームで出てきた敵だ。

『『盲目の剣士』、『不浄のシスター』、『混沌の魔術師』……あー、ゲームのトラウマが蘇ってきた』

全員美少女で、しかもクソ強い。だが敵であって仲間になるキャラではない。と言うか話し合いすら無理そうな感じであった。

「可愛いだろう?」

「……趣味、ですか?」

「おいおい、まさかそんなはずがないだろう! ……彼女たちは行く宛てのない者たちだよ。色々とワケあってね、一応各々が仕事についているが、まあ、まともにできている状態ではないな」

これ、俺、押し付けられてるんじゃない。などと思ったが、口にしない、できるわけがない。なので一先ず黙って話を聞く。

「だが彼女たちはそれ相応の実力はある。それこそ騎士団長クラスの実力がある。が、その、な……」

何か言い淀むが、俺はその理由を知っている。だってゲームで出会っているのだから。出会って、その半端のない実力差にボロ負けし続けたのだから。なんか、実際に会うとなると気分が下がってくる。今日はヤケ酒だろうな。

「ともかく、彼女たちは候補、ってだけだ! もし他にツテがあるのならばそちらに頼るといい。一応他の騎士団から引き抜きをしてもいいが……その人が所属している騎士団長とは話をつけることだ……話はこれで終わりだ。最後に手続きとしてサインをしてくれ」

手続き書に俺は手書きで名前を書く。この世界の文字で、この世界の名前で。すると書いた紙が光り出して姿形を変えて行く。三秒ほど経つと机の上には一つのバッヂのようなものがあつた。大きく『13』の数字が書かれたバッヂが。騎士団長がつけるバッヂであつた。

俺は手にとって胸元につける。これが身分証となるのだから手放すわけにはいかない。再発行には相当お金がかかるらしい。

「それではこれから活躍に期待しているよ。アルベルトくん」

「……はっ!」

俺は席を立ち敬礼をして、少女たちのプロフィールを手にその場を

後にした。

外に出て見れば雪が降っていた。魔法でついた街灯の明かりが雪に混じってゆらゆらと揺れている。懐中時計を見て見れば既に時間は夜の十時。結構いい時間だった。かなり疲れているし、このまま帰って眠るべきか、と考えていたところに声をかけられる。

「よっ、お疲れさん」

「……おう、エクレスか。今夜は冷えるな」

「いつものことだろ」

騎士団本部の入り口でずっと待っていたのだろう。金髪の男、エクレスはこの世界で数少ない俺の友達の一人だ。

こいつとの出会いは十三歳の時だ。ある時突然、こいつが家の近くに引越してきた。そして同じ騎士団という憧れを持つていたことで意気投合、お互い励まし合いながら同じ夢に向かって進み続けてきた。その結果、俺たちは二人で一緒に騎士団に入ることになった。だから前世日本人の俺が騎士団に入れたのは、こいつのおかげみたいなところはある。

(そう言えばこいつと飲みに行く約束してたな……色々ありすぎて忘れてた……)

俺は書類を折たたんで懐にしまうとエクレスに聞いた。

「今日はどこ行くんだ？」

「お前、金は？」

「今月は……まあ、って感じだな」

懐から取り出した革財布を取り出して中身を見る。騎士つてのは案外給料がいいのだが、俺はどうしても毎月ピンチになってしまう。色々と使いすぎなのかもしれない。

「じゃあいつもの安酒でいっか。おーし、仕事のことなんて忘れて飲みに行くぞ〜！」

「ははっ。そうだな、仕事のこと、か……ははっ……」

俺はこれからのことに人知れずため息をついて、エクレスとともに行きつけの酒場へと向かった。

盲目の白剣士

「ふがっ……んう……っ！　いつつう——!？」

窓から差し込む太陽の光に目が覚まし、響き渡る頭痛に飛び起きる。二日酔いというやつだ。

まずは周りを見渡して、自分が家に帰ってきたことを確認する。花屋の二階にあるアパート、そこに帰ってきたことに。

そして次に時間を確認する、今日は休日だから出勤のことは気にしなくていいだが、日課みたいなものでどうしても気になってしまうのだ。ちなみに指していた時間は朝の十時、まあまあいい時間帯だった。

「昨日何したんだっけ、確か酒場行って酒飲んで……覚えてないな、なんか飲み比べしたような気がするけど……っ、なんか寒いなあ……」

ブツブツ昨日のことを思い出しながら立ち上がり、部屋の一部に備え付けられたキッチンの隣にある、小さな箱を開けて中から水の入った瓶を取り出す。そして掴んだまま手に軽い力を込めて呷く。

「《冷氣》^{コールド}」

一、二秒もすれば温かった水はキンキンに冷えていた。魔法、この世界ではごく一般的な技術の一つである。基本的には誰に簡単なものであれば誰でも扱える。今の俺のようにただ冷やすだけなら。

俺は冷やした水をコップに移して一気に喉へと流し込む。目覚め一番の水、とても美味しく感じる一杯だ。

そして昨日のことをじっくりと思い出す。酒を飲んだことではない、十三騎士団長へと就任したことだ。俺の目的は普通に生きて、普通に結婚して、普通に死ぬこと。だと言うのに思いつきり原作に絡んでくる騎士団長の一人になってしまった。まあ、大して関わりのない十三騎士団だったからいいものの、ストーリーが始まるまで後一ヶ月もないのだ。主人公と絡まないようにするための対策、どうにかして立てなければ。

尽きることのない悩みのタネに三度くらいため息をついて背伸びをする。

朝のやるべきことをやった俺は窓を開けて、外の景色を覗き込んだ。下に見えるのは町に住む人々があっちこちと行き交う姿と、降り積もる雪で遊ぶ子供達の姿だった。そんな中に一人の少女の姿が目に入る。俺は挨拶をすべく声を上げ、その少女に向けて手を振った。

「おーい、ハナちゃん」

「……あつ、おはようございます！ アルベルトさん！」

下にいる少女、ハナちゃんは俺に笑顔で手を振り返す。俺の住んでいるアパートの一階、そこにある花屋の看板娘ハナちゃん。知り合ってもう二、三年経つはず。今日も看板娘の活躍で花の売れ行きは好調そうだ。

「調子はどうだい？」

「絶好調です！ アルベルトさんはどうですか？」

「いつも通りだよ。いい感じ、ってとこかな」

毎日の、いつも通りの挨拶を交わし終えた俺は顔を引っ込めようとした。だがそこでハナちゃんは、何かを思い出したかのように声を上げつ慌てたように俺を引き止める。

「そう言えばついさっきアルベルトさんにお客さんが来ましたよ！」

寝ている、と言ったんですがアパートの中に入って……多分もうそろそろ部屋に着くはずです！」

「え？ マジ？ あ、ありがとう！」

俺は急いで俺を言っつて、自分の部屋を見渡す。あっちには下着、こっちにはゴミ袋、汚い、とにかく汚い。一人暮らしだからと油断のしすぎが目に見える。自分の格好を見て見ればシャツにパンツとパジャマですらない。通りで寒いわけだ。

「……酒のせいだな。体が熱くなったから脱いで寝たんだ。ふ、服。兎にも角にもまずは服着ないと……」

今更ながら凍える体を救い出すために、俺は近くのタンスに手を伸ばす。壊れそうな勢いで開けると適当な服を取り出して着た。と、同時にドアをドンドンと叩く音が響く。俺はその音にビビって近く落ちていたゴミを踏んづけてしまい、大きな音を立てて転げる。

「何事ですかッ！」

その音に反応するかのように扉が蹴飛ばされ俺の近くに倒れた。かと思いきや、俺の顔スレスレのところを剣が横切った。

「ぬわあああッ!!？」

俺が叫び声を上げると二本目の剣が床に刺さる。俺は咄嗟にベッドの下に置いてあつた剣に手を伸ばすも、それを食い止めるかのように腕の近くに一本目の剣が刺さった。そしてそのまま俺の腕を踏みつけて身動き取れないようにされる。これがまた結構強くて痛いし離れられない。俺の目が正しければ、踏んでいるのは少女だと言うのに。

「あなた、不審者ですね。アルベルトさん、大丈夫ですかッ！」

「あ、アルベルトは俺だよッ！ は、離してくれ!!？」

「……………え」

かなり間が空いた後、少女は素っ頓狂な声を上げる。そして二本の剣を抜いて立ち上がると、剣を収めてドアを入口あたりに立てかけて外へと出て行った。

いや、え。なに？ 今のなに？ 理解できない…………と言いたいところだが、そう言うわけではない。俺は襲われている、と少女の頭の中ではそう理解したのだろう。なんせあの姿、身長は大体150cmくらい、長く白い髪に金色に光る目、右目には十字模様が入っており、ただ一点をじっと見つめている。だって目が見えないのだから、目を動かす必要がないのだ。

『盲目の剣士』、革命軍、魔王軍ルートにて出現する少女、ネットではトラウマビッグ3と呼ばれるうちの一人だ。

いやアレはね、トラウマ認定されてもいいと思う。理由は主に三つある、まずは盲目耐性+命中率100%、そして二刀流による攻撃力の高さ、特殊技能の一つのせいで遠距離攻撃がほぼ無効化。俺はまず、こいつと出会った時、負けイベントか何かと勘違いしてしまった。結局素早さ高いやつで攻撃される前にごり押ししたんだけどな。

で、そんな少女が俺の家へに押し入ってきたわけだが、どう言う理由で俺のところに来たのか。なんとなくだが一つだけ思い当たる節

はある。

俺は視線を机の上にある少女たちのプロフィールに移す。そこには今押し入ってきた少女、フィーゼ・ベラルトラムの名前と顔写真のようなものが貼られていた。

「……まあ、騎士団の話だろうな。まだ帰ってないといいけど」

小さく呟いて、俺は廊下に顔を出して覗き込む。そこには俺の部屋のすぐ隣で蹲っている少女の姿があった。

「うわああああああ。またやらかしたああ……うう、なんでも早とちりしちゃうんですかあ、私……いつもいつも早とちりしちゃって、ぼんやりとしか目が見えないから人に迷惑かけて……なんで生きてんだろ、私」

なんか思ってたのと違う。ゲーム内ではすごい強者っぽかった。『貴方を殺します』などと言って襲ってくるし、強いし、だが今ここにいる彼女はと言うことか、精神的に追い詰められている。普通の……とは言い難いが、ゲームの時に見たバケモノっぷりは何処へやら、少女としてそこに座り込んでいた。

一先ず俺は少女、フィーゼに声をかけてみることにした。

「あー、えっと。大丈夫、かな？」

「ひゃいっ!?! ……あ、アルベルト、さん……です、よね? ど、どこにいるかわかんないですけど……えっと……」

少し言い淀みつつも立ち上がって、申し訳なさそうにすると深々と頭を下げた。俺のいる方向とは真逆に。

「申し訳、ありませんっ!! 私が早とちりしてしまって、攻撃を……!」

「う、うん。それはいいんだけど、俺は後ろにいるよ」

「あ、ああ! すいませんすいません! すいません!!」

すいませんの連呼が続くこと数十分、フィーゼは漸く落ち着いて、取り敢えず適当に片付け、適当に直したドアを開け、俺の部屋へと入る。そしてお互い向かい合うように椅子に座って、俺は話を聞くことにした。

「で、えーっと。どうして、俺のところに来たのかな?」

「……騎士団の、話です。新しくできた第十三騎士団を、騎士総長さんから聞いて、で、その、お話したくて」

「そ、そっか。でも、どうして話なんかを？」

「もう知ってると思うんですけど、私、盲目なんです。剣を扱ってる時は感覚で人のことはわかるんですけど、日常生活だとまともに見分けがつかないんです。そ、それで、だから、仕事ももらえなくて、だから、これが最後のチャンスだったんです」

なるほどね。騎士総長が彼女を推薦したのは剣の技術はかなりのもので、戦ってる間はしつかりとわかるのが、それ以外だと物と人の見分けがつかないくらい見えないと。だから戦い以外で仕事できない彼女のために、仕事をできる場所として、騎士団に。確かに俺は彼女の強さをよく知っている、戦力としても申し分ない。

「……でも私、失敗ばかりで……ダメ、ですよ。帰ります！」

彼女は立ち上がって帰ろうとする、俺は引き止めようとして立ち上がる。そしてフィーゼはドアではなく、タンスを開けてしまった。しかも中は、適当に片付けたゴミの山で埋め尽くされている。そう、無理やりぶち込んで無理やり閉めたタンスである。

「危ないっ！」

俺は咄嗟にフィーゼの腕を掴んで抱き寄せる。するとほぼ同時にフィーゼのいたところにゴミ山が流れ込んできて埋もれた。こんな時に言っちゃなんだが、踏まれたときのパワーからは考えられないほど体が柔らかいし、体つきは細い。どんなに強くても女の子なのだと明確にわかってしまう。そして前世ではなかった経験に俺の心拍数は爆上がりである。

「あ、ありがとう、ごさいます。その、か、帰りますっ！」

俺を突き飛ばすとフィーゼは走って帰って行ってしまった。やはり嫌だったのだろうか。

まあ誰だって急に抱かれたら嫌になるよな。俺も嫌だし、仕方ない。

「……さて、久々の休日だし、片付けでもするかなあ」

一人になった部屋の中、俺は酷い惨状となった部屋を見渡して、そ

う
眩
い
た
の
だ
っ
た
。

魔術師とシスター

部屋のゴミを片付けること数時間、それ相応に部屋は綺麗になっていた。ついでに散らかっていた臭い部屋着はクリーニング屋に任せておいた。で、帰還するとアパートの管理人であるハナちゃんのお母さんから、封筒を手渡された。どうやら騎士団が持ってきたらしかった。

そこで俺は早速部屋に持って帰って開封、その中に入っていたのは第十三騎士団に関する書類だった。引き継ぎがまともに済んでいなかったのは知っていたが、何も休日に送ることはないだろう。嫌になっちゃった俺は、その書類を机の上に放り出して置く。

(引き止めるべきだったかなあ……)

フィーゼのことに關してどうするべきだったか、今更ながら考える。ゲームでは敵だった分、騎士団に入れると本編そのものが変わって俺が主人公と絡む、なんてことが起こるかもしれない。けれども彼女は失敗に、かなり悔やんでいる様子だった。最後のチャンスだった、つて言っていたし、このまま第十三騎士団に入れなかったらどうなるのだろうか。

と、頭の中でぐるぐる思考が回る。こういう事柄って一度気になりだすこと、どうしても気になってしまうのだ。

「……ゲームに絡む、絡まない関係なしに一度考えてみるか。残り二人も」

一先ず俺はこれからの生活のことより、三人の少女について考えることにした。特に明白な理由もないが、ただ一人だけの騎士団というのはこれからの生活に支障が出てきてしまうからだ。もう少し交友関係が広ければ解決したのだろうけど、残念ながら初対面の人と会話を交わすことが困難な俺は交友関係はめちゃくちゃ狭い。

それにだ、三人の強さはゲームで嫌と言うほど知っている。仲間にできるのならばこれほど心強いことはないだろう。

「取り敢えずフィーゼは後回し、落ち着いた頃に訪ねてみよう。それで問題は二人、だが……」

そう言っただけ俺は椅子に座り、しかめっ面で二人のプロフィール用紙

を手にとつて見る。一人は『不浄のシスター』。『王国騎士ルート』、『魔王軍ルート』にて出てくるキャラだ。その名通り神に仕えるシスター……のはず、なのだが。格好はコスプレ感漂う短い修道服。可愛いのは可愛いのだが、発言が可愛くないキャラだ。そしてこちらもトラウマ必死のキャラである、がビッグスリーではない。

このキャラの特徴は何と言っても、その格闘能力の高さである。武器として聖十字の剣を持っているのだが、これが耐久『3』とゴミカス。壊れたら怖くないかと思いきや、近接格闘での攻撃力が剣で攻撃するときよりも高いのだ。だが本当に恐ろしいのはここではない。本当に恐ろしいのはその広範囲回復能力にある。

「半径10マス以内の仲間を全員回復して何だよ……」

あの恐ろしい回復能力を思い出して、そして仲間になった時の頼もしさを思い浮かべる。もし仮に、騎士団に入ってくれたのならはその時は、戦闘の要になるくらいには頼もしい人材になるだろうと考えた。ただ懸念すべきは、『王国騎士ルート』で敵になる、と言う点。要は騎士団と敵対する関係にあると言うことだ。

「まあ、ゲームとは違うし。そこは俺に技量次第かな……」

どうにかなればいいけど……と考えつつ、次のプロフィールを見る。そこに書いてあったのは『混沌の魔術師』、『革命軍ルート』、『王国騎士ルート』で出てくるキャラだ。通称の通りで魔法を使う、しかもかなり強力な魔法だ。

ただ『盲目の剣士』と『不浄のシスター』と比べるとそう脅威でもない。たしかに魔法の威力はどんなキャラでも一撃やられるほどの威力があるが、彼女との戦闘に入る前にとあるイベントをこなす事で、魔法ダメージ激減できるアイテムが手に入る。しかもその上、戦闘開始の時点で何故か状態異常の『錯乱』状態にあり、命中率、移動がかなり低下している。

彼女の戦闘自体、敵には魔法使いばかりで取り敢えずアイテムを持たせて突撃させとけばどうにかなる、かなり緩い戦いではあった。

と言うわけで、ここまではとても簡単なのだが。

「……思い出したくねえなあ……」

真に恐ろしいのは『革命軍ルート』に於けるラスボス戦である。騎士団本部で騎士総長との戦いになるのだが、一定の条件を満たしていると彼女が現れる。『錯乱』しておらず、《混魔》タンクドと呼ばれる魔法を戦闘開始時に使う。これを使われると彼女を倒すまで味方側の魔法が一切使えなくなるのだ。それどころか毎ターンHPが減り、ステータスは大幅に低下、トラウマ必須のキャラである。

まあこれには、とある抜け穴があるためトラウマになることはなかったのだが。

「こつちも『王国騎士ルート』で敵対するから、その辺りも俺の手腕か……」

色々ブツブツ考えながら三人の少女の書類を置いて立ち上がる。書類だけ見てもわからない、百聞は一見にしかずと言うことがある通り、俺は実際に見に行くことに決めた。盲目の剣士ファイゼと同じように、ゲームと現実が違う可能性なんて大いにあるし。

俺はそこら辺に散らばっていた仕事服に着替える。鎧系統の重装ではなく、簡易的な動き易さを重視した服に近い軽武装だ。騎士団は基本的に所属を証明するものを身につけていけば、服装は自由となっている。と言っても大体は鎧を着込んだりすることが多い。

落ちていた剣を拾うと腰に吊るす。休日だったのに仕事服に身を包むことになるとは。まあ、その辺り前世と大して変わりないから問題は無いと言えるんだけども。

「取り敢えずは『混沌の魔術師』、エレアナからかな。取り敢えずはプロフィールに書いてあった家に行ってみて……まあ、そつから考えるか」

アパートを出て走り出す。相変わらずの寒さに雪、仕事服として手袋をつけているも手が既に冷たくなっていた。部屋の中は魔法で作られた道具、魔道具のおかげで暖かかったものの、外に出るとまた別の魔道具が必要となる。

そんな関係ないことは置いておき、俺は滑らないように軽い小走りで家へと向かった。家、と言っても俺と似たようなアパートだったのだけでも。

家から出てあまり時間要さずに辿り着いたのだが、部屋には誰もいなかった。管理人さんに聞いたところ、ここ数日は帰ってきておらず、ずっと魔法研究所にいらると言われた。軽い礼を言っておく研究所へと向かう。

魔法研究所、施設としては名前のまんまだ。魔法を研究する施設で新たな魔法を生み出したり、単純して使い易くしたりと色々している。

騎士団本部が城とほぼ直通にあるため、街の真ん中なのだが、この魔法研究所の施設もかなりの大きさを騎士団本部の少し上らへんにある。と言うのも共同で仕事をしたりすることが多いからだ。俺も何回かお世話になっている。

しばらく歩くこと数十分、似たような街並みが続く中にまるで前世の世界で言う、デパートのような建物が見えてきた。デパートと言っても窓がたくさんついており、防音性のはずが轟音が響いたりしている。そのせいか周囲には家がなく空き地が多かった。それに比例するかのように人通りも少なかった。

この魔法研究所は基本的な部分は一般公開されている。見学に来る家族や子供が案外いるのだ。ただ今は忙しいようで、見学は禁止されているようだった。

「すいませーん」

「はい」

受付で人を呼ぶと、奥の方から受付嬢が顔を出す。俺は魔道具で撮ったであろうエレアスの写真を提出する。

「この人ってどこにいますか？」

「すみません。まずは身分の提出をお願いしますか？」

「あ、ああ……これでいいですか？」

俺は騎士団長のバッジを見せる。すると受付嬢はガラス越しにハッとしたような顔をした。

「騎士団の方でしたか！ それにその番号は……アルベルトさんですね。エレアスさんは三階の個人研究室にいるはずですが……が、そのです、今は会わない方がいいと思いますよ」

「え？ どうしてですか？」

「今は多分、錯乱状態にありますから、三階自体が大荒れしていると思います。アルベルトさんは騎士団長ですから、そのぐらいのお力があれば大丈夫かと思われませんが……」

「ありがとうございます。取り敢えず見に行ってみますね」

錯乱状態で三階自体が大荒れって、どう言うことなのだろうか。ゲームでも確かに『錯乱』状態にあったが、一体全体何が原因で錯乱しているのだろうか。ゲームでは語られることはなかったが、もしかしたらここならわかるかもしれない。

(……覚悟は決めておくべきかなあ)

恐る恐るながらも、俺は三階に向かって歩き出した。

混沌のイカレ女

部屋に近づくとつれ、轟音が更に大きくなって行く。爆発しているかのような音に、俺は度々足を止める。

「こわっ……何やってたこんな音が出るんだ？」

腰に吊るした剣をいつでも抜けるように覚悟だけは整えておき、三階へと辿り着く。三階についてまず感じたのは『臭い』の一言。腐乱臭を三倍濃縮した上で腐った牛乳を混ぜ合わせたような酷い臭がする。世界一臭い食べ物、とかあったけどあれよりも臭いんじゃないだろうか。異世界じゃなかったら死んでる。

正直な話、これより酷い臭いは過去の任務で経験したことがある。例えば酷い状態にある死体だったり、呪われている死体だったり……まあ、とにかく死体の匂いだ。戦場というのはいつものどこかで死体の匂いがする。

「なんか大変なことになってたり、しないよな……？」

俺は音を出さないように慎重に歩き始め、剣をいつでも抜けるように柄を握る。研究所の個人研究室に来るのは初めてで、これがいつも通りなのかどうかいまいち理解できないのだ。ただあつちこつちで爆発に似た音が響いているところを見るに、通常通りそうなのがなんとも言えない。

「エレアナ……エレアナ……あった、この部屋だな」

少しの間、音もなく歩いていると部屋の前に辿り着く。頑丈そうなドアは何故か凸凹で、俺は少しびびってしまい後退りした。だがここで帰るわけにはいかない、剣から手を離しノックする。

「第十三騎士団、騎士団のアルベルトです。エレアナさん、少しお話があるのですがよろしいでしょうか！」

………返答はなかった。しばらく扉の前で立ってみるがやはり返答はない。もう一度ノックする。今度は少し多めに。

するとドアの向こう側から爆音が数回響く。急いでドアに耳をくつつけ中の音を聞こうとするも、防音のせいもあるのか中から声らしきものは聞こえない。俺は万が一のことを考えてドアを蹴破って

中に突撃した。

「エレアナさん！ 大丈夫ですかッ!!」

「ヒャアアアアアッ!!!」

中に入った俺が見たものは、半狂乱状態で叫びながら、俺に向かって飛び出してくる赤い髪の美少女の姿だった。見たくないものを見てしまった俺は一瞬だけ硬直し、すぐさま軽く体を逸らして横に避けようした。

だがその少女は空中で何をしたのか、空気を蹴って方向転換すると俺に向かって腕を振りかぶる。俺は避けた直後によるけるように下がっていたため、すぐさま回避行動に移れず、咄嗟に剣を抜いて構えた。

「そこどけええええええッ!!」 フレア・バースト 《焰熱暴発》ッ!!」

少女の叫びとともに手が放たれる轟音、爆熱。閃光のように光った手から超強力な爆発が起きた。当然だが剣で防御しても防げるわけがなく、俺は剣をしっかりと握って爆発の中で下から上へと真っ直ぐとどてつもない速度で振るった。俺の編み出した剣術の一つ《風切り》。由来はそのまんま、風を切り裂く剣だからこんな名前になった。

爆発はまるで切り裂かれるように俺を避けて真っ二つになる。そして爆発が消えると同時に俺はエレアナの姿を探す。

「……ポーションッ!! ポーションポーションぽおおおおおしょんッツ!!」

エレアナは大量に積んであるガラス瓶の中に顔を突っ込んで、何かを探していた。正直もうこれ以上関わりたくなかったが、ここで帰るわけにもいかなかった。と言うか、エレアナもまたゲームとは全く違う。『錯乱』状態と言ってももう少し落ち着いていた、発狂なんてしていなかった。だが今の彼女は酷い有様だ。近寄り難いと言うか関わりたくないと言うか。残念美少女の飛び級である。

「んうっ……い！ んっ、んっ……ふう……」

赤い液体が入った瓶を取り出したエレアナは、それ一気に飲み干す。するとさつきとは打って変わって、とても落ち着いた様子で偉そうに座って、俺の方を見た。

「あの、エレアナ、さん？」

「……あー、見苦しいところを見せたわね」

見苦しいとかそう言う問題じゃないだろ。と言いたくなかったがその言葉は飲み込んでおく。

「いや、見苦しいとかそう言うのじゃないでしょ」

「ごめん、やっぱ無理。自然と口から彼女の言葉を否定する言葉が出ていた。」

その言葉にエレアナは顔を真っ赤にして怒る。

「しよ、しようがないでしょっ！ 私にも色々のあるのよっ！ ……で、何の用かしら？」

「ちよつと話をしにきたんですよ」

「話？ ……そもそもアンタ誰？」

「聞いてなかったのか……アルベルトです。第十三騎士団騎士団長のアルベルト」

「ふーん。知らないわ」

知らないなら言わなくていいだろ。と言うか色々失礼だなこいつ。偉そうに座ってなんか見下すような目で見て。一発ぶん殴っても許されるだろうか。だがここは我慢して平常心を保って話を続ける。

「で、さっきのはなんなんですか」

「関係ないでしょ!？」 と言うかその話は終わったでしょ、どう見てもっー！」

「いえ、気になるんで」

「気になるってあなたねえ……まあ、見られてしまったものは仕方ないわね。アレはポーシオン中毒よ」

「ポーシオン中毒って……」

ポーシオン中毒、いわゆる薬物乱用みたいなものだ。この世界におけるポーシオンと言うのは回復薬として重宝される。効果が高いと腕一本軽く再生できるものだってある。ただそれは市販のポーシオンが、って話だ。このポーシオンと言うものは個人で作ることが禁止されている。ポーシオンと言うのは作り方を一つミスると回復力は

あつても強烈な中毒性が出てしまうのだ。それこそ、なかなかの頻度で服用しなければならぬほど。

これで傷害事件を起こしてきた人を何度も取り締まっている。ポーション切れでの錯乱状態がなかなか大変で……あ、なるほど。ゲーム中での『錯乱』状態ってこれのことだったのか。まあ、ここまです酷くなかった理由はよくわからないが、ともかく謎が解けてスッキリしたような気分だ。

でだ、本題に入りたいのだが、入ろうにも入る気になれないと言うか。

(アレは、なあ……)

取り敢えず話を区切って、一旦帰ることにした。

「で！ 何の用なのよ！」

ちよつと怒った様子で、エレアナは俺のことを見た。俺は一步下がって扉に手をかける。

「いえ、今日は挨拶に來ただけなんです。また来まーす」

「へ？ え？ ちよつ、ちよつと！ まっ——」

なんか止めるような声が聞こえたような気がするが、俺は何も聞かなかつたことにして、その場を立ち去った。研究所を後にしている時、俺は今からのことを考えていた。後一人、シスター。彼女は一体どんな人間なのだろうか。もはや騎士団、大丈夫なのだろうか。色々と考えて、次の場所へと向かっていった。